

近代文体史論

小林茂大

第一 明治初期の文体

私はこの近代文体史の出発点を明治維新に置こうと思う。人間の精神や生活感情は、政治上の變革によつて直ちに變化を来すものではないから、精神史や文芸思潮史等の時代区分が、常に政治史のそれと一致するとは言えない。殊に文章表現のようなものに於ては過去の習慣に昵み易いものであるから、その時代的特徴を述べる文体史に於ては一層政治史との一致を強制することは出来ないのである。しかしながら、わが国の文化諸現象の近代化を述べようとする時、それは政治史に於けると同様、明治維新に出発点を置くことが最も便利であり且つ妥当な方法であると考えられる。

明治維新は周知の如く、民衆の自覚を原動力として行われた民主的革命ではなく、封建制度自体の自襲作用を契機とした武士階級内部の闘争による一種の政変であつた。それは「明治維新」は「王政復古」であるという反対概念の上に立っていたのでも明かである。徳富蘇峰の言を借りれば「明白に二個敵対の大主義に導かれた『双頭の蛇』（「國民之友」二〇七号）であつたのである。

この「維新」であるとともに「復古」であるという二概念の対立は既に国是としての明治元年三月の「五箇條の御誓文」にもうたわれていたことであつた。この国是は押寄せる西洋帝國主義の間に於てわが国が自らを守らうとする為にとられた自衛的態度であつて大隈重信は「内は皇室を尊奉し、外は列國の圧迫に對して、邦家を維持せんとする國民の精神」（開國大勢史）と言つて居り「今の日本人を文明に進むるは、此國の獨立を保たんがためのみ」（文明論の概略）と福沢諭吉も言っているのである。

この「復古」と「維新」という二概念を調和發展せしめて、列國の圧迫を排除し如何にして日本の獨立を維持するかということが歴代政府の課題であつたので、それは強力な政權を樹立して國力を統一し、黒船によつて象徴された西洋の物質文明の脅威を、わが国もそれを持つことによつて免れることにあつたのである。「世界に求められた知識も西洋近代文化への素直な耳目の開放ではなく、目標は「大いに皇基を振起」することに置かれていた。即ち目標されたものは文化國家でも福祉國家でもない富國強兵國家であつたのである、その「維新」は民衆の近代的自覺に基く維新ではなく、「王

政」の「復古」によって国家を統一し、外敵の侮りを防ぐためのものであった。この目標に向って傾注された明治の大努力は西洋の機械文明を短時日に学びとってその速かな進歩は彼等に驚異の眼を眩らせるほどであったが、その出発点に於て既にわが文化の跛行性が伏在していたことに注意しなければならぬ。

従つて四民平等は唱えられても、それはそのまま一般民衆の生活感情となつては来なかつた。自分達が克ちとつた権利ではなく上から与えられたものであつたからである。事実、明治の支配者達や指導者達は殆んどが武士階級の出身であつたし、「官員様」に対する民衆の感情は旧幕時代の「お武家様」に対する感情と本質的には餘り異つたものではなかつたのである。

武士階級の教養は漢学を根幹としたものであり、彼等の文章は漢文体の文章であつた。簡潔勁健でしかも莊重な韻律を有する漢文体の文章は、封建制度のもとに養われた日本武士のストイシズム (stoisim) と威儀とによくマッチする。漢文は平安朝時代以前からわが国の学問のオーソドックス (orthodox) であつたが公家階級の好んで学んだものは中国文化の爛熟した唐時代の詩文であつた。徳川幕府はその政治理念の據点として仁義忠孝を基とする儒教を奨励したので中国文化に於ても質実な上代の風が学ばれ、これが当時の武士階級の気風の思想的背景をなしたのである。

明治初年に出た「柳橋新誌」(明治七年成島柳北著)、「東京新繁盛記」(明治七年服部撫松著)、「花月新誌」(明治十年創刊十六年発行禁止。成島柳北主宰の雑誌)等を見ると、いづれも市井に題材をとつた戯文ではあるがその文章は鹿爪らしい漢文体である。

柳橋新誌 北島 柳北

慶應以降百貨の舖皆其の産の半を耗し、而して割烹家獨り潤屋の富を擅にするは何ぞや。府内の人口其の半を減じて、遊客其の數を倍するの故也。人口減じて遊客倍する者は何ぞや。人々玉化の美を樂んで、後世子孫の計を為さず、一錢を獲れば則ち食ひ、一楮を獲れば則ち飲む故なり。柳橋の酒樓、皆勢を往日に殊にす、河長、梅川、盟を橋の南北に争ひ、萬八亦將に衰頽の氣を一振せんとし、龜清、柳屋は新境を新柳街に拓き、而して旗幟色を添ふ。

東京新繁昌記 服部 誠一(撫松)

西洋目鏡

鴻雁の翔ける糞囀も猶ほ翼を振り、衣服の行はるゝ裸體も亦た腰を括る。これ目鏡の繁昌に入つて而して寫眞と共に紅帘を飄へす所以也。始め場を淺草の奥山に開く者有り、後數月ならずして而して數處に及ぶ、殊に鶯瀨邸鶯瀨新街の新街に多し矣。蓋し耕さずして而して食ひ織らずして而して衣る者の工夫歟。未だ眞の市人にして而して此の觀を賣る者を見ず、觀室は概ね小塗屋を築き、前面纔かに白徑を塗つて而してその尻を拭はざるは、恰も龜婦の白粉を面に施して垢を背に存するに似たり。

當時の翻訳としては明治四年に中村敬宇の「西国立志編」明治五年に齊藤了庵の「魯敏孫全傳」六年に渡辺温の「伊蘇物語」七年に小林謙吉の「西洋孝子流別奇談」八年に永峯秀樹の「開卷驚奇暴夜物語」九年に佐藤喜峯の「天路歷程」十年に山田正隆の「回生美談」十一年に織田純一郎の「花柳春話」等明治初年に於ても意外に多く

出て居り、中には「伊蘇普物語」や「天路歷程」のように既に口語体に訳したのも見えるが、大部分は生硬な漢文体の文章を以て訳されたものであった。

西國立志編

中村敬宇 訳

原名 自助論

天。自ら助ケルモノヲ助ケ (Heaven helps those who help themselves) ト云ヘル諺ハ、確然經驗シタル格言ナリ、僅ニ一句ノ中ニ、歴ク人事成敗ノ實驗ヲ包藏セリ、自ら助ケト云フハ、能ク自主自立シテ、他人ノ力ニ倚ラザル丁ナリ、自ら助ケルノ精神ハ、凡ソ人タルモノ、才智ノ由テ生ズルトコロノ根原ナリ、推シテコレヲ言ヘバ、自ら助ケル人民多ケレバ、ソノ邦國、必ズ元氣充實シ、精神強盛ナル丁ナリ、○他人ヨリ助ケテ受ケテ成就セルモンハ、ソノ後、必ズ衰フル丁アリ、シカルニ、内自ら助ケテ為ストコロノ事ハ、必ズ生長シテ禦グベカラザルノ勢アリ、蓋シ我モシ他人ノ為ニ助ケテ多ク為サンニハ、必ズソノ人ヲシテ自己勵ミ勉ムルノ心ヲ減ゼシムル丁ナリ、

開卷驚奇暴夜物語

永峯秀樹 訳

韃靼王(弟、須加是南)ハ兄弟ヲ見送り獨リ一室ニ閉籠リ只管身ノ不幸ヲ思ヒ出テ悲歎ヤルカタナキ折カラ心ナク窓ノ開ケタル處ヨリ園庭ノ草木ヲ展眸バ忽チ數對ノ男女青天白日ヲ憚カラズ青苔ニ坐シ一對ニ相饗レル者アリ王怪シミ是レ何人ナランカト瞳ヲ定メテ熟視レバ豈圖ランヤ中ニ就テ最も美貌華服ナル婦人ハ別人ニアラズ即兄弟ノ愛後ナリキ

近代文體史論

花柳春話

織田純一郎 訳

ロードリットン原作「アーネスト・マルトラウヴァース」
杜鵑血ニ叫ンデ緑樹陰ヲ成シ晚鶯口ヲ箝ンデ牡丹花ヲ着ントシ恰モ是春末夏初ノ天ナリ時ニ見ル繡幕半バ開ヒテ窓下ニ萬巻ノ書ヲ積ミ花瓶盛ニ綻ビテ牀上ニ一張ノ琴ヲ置キ中ニ佳麗ナル一少女(アリス)アリ頭ニハ緑ノ美髪ヲ結ンデ身ニハ淺紺ノ美衣ヲ着ケ坐シテ籠中ノ鸚鵡ニ新詩ヲ教ユ傍ラニ一少年アリ机ニ凭テ頻リニ書ヲ讀ミ一室ノ景況活畫に異ナラズ誰カ此兩人ヲ談マザルモノアラシヤ時己ニ斜陽剩紅ヲ斂メテ遠鐘黃昏ヲ報ズ少年舛ヲ収メ少女ニ對シテ曰ク余ハ此薄暮ノ時ヲ愛ス卿亦然ルヤ曰妾最も此時ヲ好ムコト恐ラクハ君ヨリモ甚シカラン他ナシ唯此時ハ妾ガ君ヲ思フノ情殊更ニ切ナレバナリ疑フラクバ君却テ妾ヲ思ハザルベシ
こういう文章が当時の知識階級に愛好されていた一方には、江戸時代の戯作式亭三馬、山東京伝などのものやその直系の假名垣魯文などの作が市井に於ては盛んに読まれていたので、魯文は明治三年に「西洋道中膝栗毛」四年に「安愚楽鍋」五年に「胡瓜遣」等を書いてゐる。

牛店安愚楽鍋

假名垣魯文

天地は萬物の父母。人は萬物の靈。故ゆゑに五穀草木鳥獸肉。是が食となるは自然の理にして。これを食べふこと人の性なり。昔の里諺に。首文爺のたぬき汁。因果應報穢を淨むる。かち／＼山の切火打。あら玉うさぎも吸物で。味をしめこの喰初に。そろ／＼開化し西洋料理。その功能も深見草。牡丹紅葉の季をさらは

ず。猪よりさきへだらく歩行。よし遅くとも怠らず。往來絶さる淺草通行。御藏前に定鋪の名も高簾の牛肉鍋。十人よれば十種の註文。昨晚もてたる味噌を擧。たれをきかせる朝歸り。生のかはりの粋がり連中。西洋書生漢學者流。劉訓に似た儒者あれば。肖柏めかす僧もあり。士農工商老若男女。賢愚貧福おしなべて。牛鍋食はねば開化不進奴と鳥なき郷の蝙蝠傘。鳶合羽の翅をひらげて遠からん者は人力車。近くは錢湯歸。藥喰。牛乳。乾酪洋名乳油洋名牛腸はことに勇潔。彼肉陣の兵糧と。土産に買ふも最多き。人の出入の賑はしく込合の節前後御用捨。御懷中物御用心。銚子のおかはり。お會計。お歸なきさい入ラツしやい。實に流行は晝夜を捨ず繁昌斯の如くになん。されば牛はうしづれの同氣もとむる肉食群集席を區別しありさまを。一個々々に穿て云はまづぎつとしたところが
ごこんなものでもあらうか

こうした開化初期の文章の漢文的表現と戯作的表現の対立混淆は、儒教的武士道精神及び感情が未だ士族を中心とした階層を支配して居り、一般庶民階級には江戸時代的な町人意識と趣味が残存していたことを物語っている。この文章表現上の二元的状態はそのまゝ旧幕時代の姿であり、このことは間接には明治維新が一般民衆とは殆んど無縁に行はれた政変であったことを裏書きするのでもある。

しかしこの間にあって、当時有識者で文明開化のために民衆の啓蒙に働いた明六社の人達などは文章を出来るだけ平易にして俚耳に入り易からしめようとしたのである。明六社とは明治六年に成立した洋学者の学会の名で、西村茂樹、杉亨二・西周・津田真道・中村

敬宇・福沢諭吉・加藤弘之・森有礼等が居り、彼等は幕府が安政三年に開設した蕃書調所の教官や幕府の翻訳官などの職にあった人達である。彼等のうちには西洋に留学して来た者も多く、幕府が保守的立場に置かれていた幕末期には時代の主導的立場に立つことが出来なかつたけれども、維新と共に文明開化の先頭に立ち毎月定期的な公開講演を行ひまた「明六雜誌」を刊行して欧米近代思想による啓蒙運動を展開した。従つて彼等の文章は文飾に煩わされた美文的漢文調でも、七五調の因襲のリズムと駄洒落に毒せられた戯作調でもない、真面目で論理的でしかも平易な一種の新しい文体であつた。その代表的なものは福沢諭吉の文章であるが、加藤弘之も明治三年にその「眞政大意」に言文一致を用いている。

世界國盡 明治二年 福沢諭吉

世界は廣し萬國はおほしといへど大凡五に分けし名目は「亜細亞」「亜非利加」「歐羅巴」北と南の「亜米利加」に堺かざりて五大洲大洋洲は別にまた南の島の名稱なり土地の風俗人情も處變ればしなかはるその様々を知らざるは人のひとり甲斐もなし學びて得べきことなれば文字に遊ぶ童子へ庭の訓の事始まづ筆とりて大略をしるす所は

亜細亞洲

圓き地球のかよひ路は西の先にも西ありてまれば歸るものも路環の端の際限なき太平洋の西の方「亜細亞洲」の東なる我「日本」を始とし西のかたへと乗出しその國々を尋るに(下略)

の制約を全然受けていないとは言いが、その読者は文を書く者の頭の中に描かれた読者であつて直接的現実的なものではなく、文を書く人によつて自由に変換することの出来るものである。

次に口述語の場合一度口外された言葉は言い直すことは出来ても前言を聴者の記憶から完全に拂拭してしまうことが出来ない上にそれが相手を前にして語られているものであるため一定の速度が要求されるであろうが、記載語の場合に於てはこれらの制約から解放され充分表現効果を考えたと上表現することが出来るのである。

更に記載語の場合は言葉に置き換えられた文字の外自己の表現を果すものではないのであるが、口述語の場合に於ては、言葉自体の意味の外に言葉調子 (intonation)、身振り、態度、表情などが語られてゐる言葉を背後から支えて、その意味や感じを補足してくれるのである。が、記載語の場合字形の外はそうした補足してくれるものを欠くから、文そのものの中にその欠けたものを創り出して行かなければならないのである。即ち記載語による文章は口述語による言葉よりも、表現上の工夫を必要とすることになるのである。

人はそれぞれの属する地域、階級、職業、教養、年齢等によつて、その思考、感情、感覚の仕方一種の共通性を有するものであるが、その共通性は所属を異にする相互に於ては同時に差異性である。しかし同時代に於てはそれらの差異も相互の通達 (communication) に大きな支障を来さない程度のものであるが、人間の思考感情等は社会状況によつて変化するものであるから、時代が変り社会状況が変化するにつれて言語も次第に変化し、長い年代に隔てられると、特別の学習によらなければその意味を明かにし難いほど

の大きな差異となるのである。こうした言語の変化は、言葉が現実活動している間に起るのであるから、現実の活動性の強い口述語の世界に於て起るので、記載語の世界に於ては口述語の世界に於けるほど活潑ではない。と言うのは文を書く場合に口述語のように書けば問題は起らないのであるが、前述の如く記載語は表現的に工夫されたものであるから記載語は記載語を手本とするようになり、時代を隔てるに從つて次第に口述語と記載語は二つの途を別々に歩くようになり、両者の距離が大きくなって行くのである。

バイイ (Charles Bally) は人間の言語活動の歴史を顧みて、それは美的理想も論理的理想も追つていゝとは考えられない徒勞の連続であると考へたが、彼はなおかつそうした中にも、人間のよきものに対する渴仰、万物完成の信仰に希望をつなぎ、人間の生活と言語の進歩を信じようとした。「言語活動と生活 Le langage et la vie (1933)」
いづれの国でも政治や文化や経済の中心地の言葉は強い伝播力を持つてゐるものであるが、それはその言葉の美的価値或は論理的価値のためではない。言葉自身の持つそれらの価値のためにそれが真似られるのではなく、それらの言語の背後にある生活価値の魅力によつて真似られるのである。田舎者が都会の言葉を真似るのは、都会の言葉の美的価値や論理的価値の認識に立つてそうするのは、都会人の生活が自分達の生活より経済的または文化的に価値が高いと思つて居るところからそうするのである。だから自分達の生活価値に自負を持つてゐる地域に於てはその方言を捨てようとしないう傾向を強く持つてゐる。今日京阪地方の方言は自らを卑下してないし、明治初期に於て薩摩や長州の方言が書生や壮士の言葉として

東京に於ても幅をきかしたのは、明治新政府の要人が多く薩長の出身者であったことによるのである。

わが国の言語史を見ると、武士階級が政治的社会的に主導権を握るようになってから漸く言文不一致の現象が顕著になって来た。武士は持(さむらい)とも呼ばれたように元來は公家階級の従者または護衛者であったので文化の創造者でも荷担者でもなかった。従って彼等は政治の主導権を執るに至っても文化的には全く自信がなく文化の面に於ては堂上貴族を尊敬しその文化に憧憬を抱いていた。

一方政治的に敗残者の地位に転落した公家階級は、文化の創造に於ても餘喘を保つに過ぎなかったが、自らの權威の保持を文化の担い手としての地位にかけ、出来るだけ祖先の創造した文化を尊厳にして価値あるものに見せようとする必要があった。中世期の尚古的風潮もそうしたところに源がある。「何事も、ふるき世のみぞしたはしき。今様はむげにいやくこそなりゆくめれ」と兼行法師は歎じている。和歌の家に門閥が起つたこと(二條、京極家の対立)「古今伝授」等の伝授思想が起つたことなどは当時の公家階級が文化荷担者としての自己の地位を守ることに如何に汲々たるものがあつたかを物語っている。当時、武士階級の保護のもとにその風尚を反映して発達した能楽の詞章を見ると、過去の由緒ある文章語のおびたゞしい引用が行われていて、こゝにも極端な前代文化への憧憬が見られるのである。しかし、そうした中にも既に庶民階級の自覚が次第に萌芽を現わしかけている現象も見られるので、能楽と共に演ぜられた狂言には当時の口述語が用いられているのであるが、しかし口述語が滑稽を主とする演技にだけしか用いられなかつ

たところに、未だ口述語が芸術的言語として充分な資格が与えられていなかったことが知られるので、公家の間に発達した言葉は雅語と呼ばれて尊敬されて文章語の資格を独占し、これに對し現実に庶民の間に用いられていた口述語は俗語と卑められていたのである。

近世に至ると庶民階級の経済力の上昇とこれに伴う自覚による文化的要求は、彼等の日常の口述語をたゞちに文章語にする機運を開くに至つた。「俳諧の益は俗語を正す也」⁽⁹⁾と芭蕉は言っている。が、この言葉にはまた日常の口述語を鍛練して芸術的表現に堪えるものにすることを俳諧に於けるひとつの使命と考えた彼の目標が覗かれる。次第に多くの庶民階級の作家が現われ、彼等の日常の口述語を以て作品を書くようになったが、身分階級の厳守せられた當時に於ては武家階級と庶民階級とは日常の口述語に於ても可成の差異があり、しかも社会的には武家階級の下位に立ち、政治的発言権を全く奪われていた庶民階級の者が自らの思考感情を表現するには正面からの積極的発言は不可能であつたところから諷刺、揶揄或は自嘲という形で発言するのは止むを得なかつたので、それが所謂戯作調と称する表現態度の一つをなしている。

明治維新が、民衆の自覚によつて起つた民主革命でなく、武士階級の間に行われた一種の政変に過ぎなかつたことから、政治の形は變つても民衆の生活感情には旧幕時代のものがそのまゝ残存していたことは既に第一章に於いて述べたところである。

しかし、それが外国から強要された開国であつても、世界に向つて開かれた耳目は次第にわが国民の生活を変貌せしめずには措かなかつた。そしてその革新の先頭に立つて啓蒙に努めたのが明六社の

人々であったことも既に述べたところである。

文字は思想を伝達する記号でつて文化の発達に重要な關係を及ぼすものであるが、わが国に於て從來使用されている文字は假名文字と漢字があり、中国文化への依存は既に過去のこととなり、それに代つて欧米の文化の吸収が焦眉の問題に變つて来た時代に於て漢字の学習が學問の進歩に不必要な負担をなしていることが識者の問題となつたことは極めて当然のことであつたと言わなければならぬ。漢字廢止を唱えたものには早く慶応二年に前島來輔が時の將軍徳川慶喜に奉つた「漢字御廢止の儀」という建白があつたが、明六雜誌創刊号には西周の「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」が載せられ後に初代の文部大臣に就任した森有禮は英語を以つて國語とすべしとさへ言つた。西の洋字論は後のローマ字論の濫觴をなすものであるが、それは國語表記の問題に止まつて言文を一致せしむべしとの提唱ではなくその言うところは文語のまゝのローマ字表記であつた。しかし言文一致の提唱は既に前島來輔の「漢字御廢止の儀」の但口舌にすれば談話となり、筆書にすれば文章となり、口談筆記の兩般の趣を異にせざる様には仕度事に奉存候とある文に表わされていたのである。

明治になつてからの言文一致論の最も早いものは明治十七年十月発行の「學士會雜誌」第七篇に掲げられた神田孝平の「文章論を読む」であろう。これは西村茂樹の述べた「文章改良論」を迂遠なりとして、言文を一致せしめることの急務なるを論じたものである。明治十六年十一月鹿鳴館が落成し、二十年四月には時の總理大臣伊藤博文主催のもとに盛大な假裝會がそこで催された。この前後數年間が所謂

鹿鳴館時代と呼ばれるが、それはわが国にとつて不利益不面目な條約を改正するために、政府の奨励によつて性急な欧米化が行われ、種々の改良運動が起つた時期であつた。早く一部有識者によつて考へられていた國字國文の改良も、この時期の改良運動の機運に乗じて盛んに論議され出した。國字の改良運動としての「かな文字運動」「ローマ字運動」「國文の改良運動」としては「言文一致運動」がそれである。この頃言文一致について論じたものに前記の外、物集高見、小中村清矩、有賀長雄、坪内逍遙、山田美妙、森鷗外の諸氏があるが、以下物集高見と坪内逍遙二氏の論ずるところをみよう。

明治十九年帝國大学教授物集高見は「言文一致」といふ小冊子を刊行したが、これは彼が「かなの會」で行つた講演の草稿を後上木したものであつた。七章に分けて述べているが、彼が言文一致を主張する論據は四つに要約することが出来る。その一は、言文を一致させると字句から起る誤解がなくなり、従つて字句の釈義というやうなことは自然無用になるといふのである。

全体、はなしは、人のよくわかる様に、はなすのが、よからう。然る時は、其はなしを、書いたものもよくわかる様に、書くのがよからうところだとへ、はなす様に書いたとて、はなす様には、ゆかぬ故に、別して書き方には、氣をつけねば、なるまい。それゆゑに、はなす様に、書きとりて、なるだけ、わかり易く、するがよからう。左様にさへすれば、意味違ひの、心得違ひの、行違ひの、思ひ違ひの、是れは、左様な考へでは書かなんだ、などと、争ふやうな、間違はなくなり、間違から起る、詞訟もなくなり、血税を血を搾るか、考へ違ふなどは、昔の話と、なるであらう。學

校などでは、教員をも、へらす事が出来て、民費がへらう。

その二は言文を一致させると国語が統一されるというのである。

これまでの文通が、手紙の文句を、一様にした、力を考へますれば、若し、今にても、はなしと、文句とを同様にして郵便を、やとふことならば、それこそ、日本全國のことだが、一人の様に、なりまして、十返舎も、筆を、すつるでありませう。

と言っている。その三は言文一致になれば国語が美しくなるというのであり、その理由は

書くとなると、氣をつけ出します。現に、芝居の臺詞は、書くのではないけれども、無用の詞は、一句もなく、立派に、水きはだちて、をります。書くのでなくとも、かやうなれば、書いて、跡に、形を留むる上からは、どうして、雲助詞を、出させませうぞ、必ず、立派になるには、違ひありません。

と言うのである。その四は、口語こそ本当に生きた言葉であるということである。

自身の、腹から出るは、天然なれば、生きてをるが、人の眞似をするは、似せものなれば死にてをる。

と言ひ、

人眞似の鸚鵡文は、やめてしまつて、自身の口から、天然自然と湧き出る、活潑な、生きたはなしを、生きたまゝに、書いたならば、それこそ、誠によかろうと、思はる。

と言っている。而して口語体は対話体と記述体とに分けるべきであるとし、記述体の文は敬語を除けた方がよかろうとも述べている。

この「言文一致」に言うところは、主旨はわかるが、一日で書きあ

げたと言っているだけ口述語と記載語の本質についての考察が不充分であり、たゞその効果についての基だ誇示的樂觀的議論であるが、当時の国文学者の立場からの意見として注目すべきである。同十九年の五月と七月の「中央美術雑誌」に載せられた坪内逍遙の「新文章論」にはまた、作家の側から考えられた言文一致についての異なる見解が見られる。

彼はまず文章は談話の舟車に相当するものであって自己の心の働きを他人にまで運び伝えることが目的であるから、文を先にして意を後にし、文の為に文を綴るべきではないと言ひ、次に文章を人間の心理の知・情・意に対応して三つの類型に分け、知・情・意はその発達段階から言うて感情が知力や意志に先だつて発達するのである、感情は智の元であり意志の母であつて人類進歩の根元であると言ひ、そこから文章に於ては「文は感情を表するを主とす。感情を表すること能はざる文辞は文の完美なるものにあらず」と言う。では如何なる文章が最も感情を表わすに適するか。彼はそれはエロキューション (Elocution) を応用することが出来る文章であると言う。(逍遙はこれを「読書法」と訳している)そしてエロキューションを応用出来る文章は、西洋の文章がそうであり、わが國のものでは三馬・一九・春水などの俗言文であると言うのである。かように逍遙は文章の美的立場から言文一致体を主張したので、したがつてそれが美的条件に反する時は言文一致も不可なのであつて、そうした言文一致には賛成出来ないと言つのである。

世間普通の言文一致論は、ひたすら文章を言語と同じく其儘ありのままに寫せよと申せど、予は其様なる事は申さず。唯読書法を

応用し得べき（即ち感情を表明し得べき）活きたる文章をもものし
てよと乞ふ也。たとへ文章が言葉の如く、文句ごとごとく俗語な
ればとて、感情いちじるしく現はれずもあらば、却りて昔風の文
章にも劣らん。蓋し感情を表明するの手段は單に俗語の儘寫しい
だすといふ唯一の手段にのみ限らざれば、只管言のまゝ文をなす
はそもそも狹隘なる了見方なり。

逍遙の言文一致体論は、それが感情を表現する便利だからという点
にあるので「余は決して言文一致を妄に主張するものにあらず、否
言文一致といふことは予が主眼とすることにあらず。唯感情を表明
するをもて文辭の主体なりと心得べしといふ也」というのが彼の結
論なのである。こうした逍遙の見解は早く既に彼の「小説神髓」の
中の小説の文体を論じたところに見られるのである。（小説神髓の
発行は明治十八年九月であるが脱稿したのはそれより二年前で、そ
の後時々訂正したものという）

「小説神髓」下巻「文体論」に於て彼は従来用いられた小説の文
体を雅文体、俗文体、雅俗折衷体の三つに分けてそれぞれの長短に
ついて論じたが、俗文体は世話物語に適し「情文變つながら相適ひ
て、すこぶる精妙」であるけれどもそれとて幾らか雅文体を斟酌し
なくてはならない、第一豪宕な情景を写し出すには現在の俗文体で
は困難であると言ひ、

故におのれは断じていへらく、俗言をもって物語の詞を寫すは妨
害なし、但し他の文にいたりては（我が國の俗言に一大改良の行
はれざるあひだは）俗言をもて寫すべからず。蓋し是れが為に物
語の進歩をさまたげんかと恐るればなり。

と述べているのである。

逍遙の「新文章論」に於ける言文の一致体についての意見は、この
「小説神髓」の文体論と同じ見地に立っているのである。

物集高見と坪内逍遙の言文一致論は前者が重点を伝達（Comm-
unication）に置き後者が文章美に置いているという相違がある。

つまり言語学的立場と美学的立場の相違であった。而して、言文一
致体が後の文体を決定したのは、言文二途を行くことが伝達に不便
であったこと、言文一致体が逍遙の希望するような感情や情緒を
表現するに遺憾なきまでに発達して来たためであるが、この期の言
文一致論に、それがたゞ伝達の便利ということだけでなく文章表現
の美的要求を充たすものでなければならぬことが論じられたことは
注意すべき点である。なお「新文章論」でも敬語法は言葉を冗長に
し文勢を損ずるから記事体、叙事体、辯論体の文章には不適當であ
ると物集高見と同意見を述べている。